大学における視覚障害学生に対する支援や配慮の実態調査

―定期試験での配慮の状況と希望を中心に―

○清和嘉子　　　青松利明
（筑波大学附属視覚特別支援学校）

KEY WORDS:　視覚障害　障害学生支援

１．目的

現在は、視覚障害のある学生が大学のさまざまな学部・学科に進学するのが可能な時代になっている。また、大学進学にあたり、受験時や入学前には、試験の実施方法、授業への参加、教科書の点訳体制、大学で備えるべき支援機器、通学および学内の移動の際の支援などについて相談の場が設けられ、視覚障害学生が大学生活を送るにあたって必要な支援や配慮の内容が協議されている。しかしながら、支援内容については、大学間で格差が見られたり、当事者の希望と実際の支援内容に差が感じられたりすることがある。そこで、全国盲学校長会大学進学対策特別委員会（現、大学進学支援委員会）は2008年度に、大学に在籍中の視覚障害学生が、学生生活をおこなう上で受けている支援の現状と当事者の希望を明らかにすることを目的に、「視覚障害学生実態調査」を実施した。その結果、支援の現状と当事者の希望の間に差があることが明らかとなった。

2008年度に「視覚障害学生実態調査」が実施された後、障害者関連の法規の改正や制定も進み、「合理的配慮」という言葉が社会に浸透し、障害学生の受け入れにおいても重要視されるようになってきたため、支援の現状と当事者が希望する支援内容との間の差が変化してきているのか、また、支援の現状および希望のそれぞれについて変化がみられるのかを分析し、今後の視覚障害学生の学習や生活環境の整備につなげることを目的に、2015年度に再度、視覚障害学生の実態調査を行った。

２．方法

対象　対象は、国内の一般大学および大学院に在学する視覚に障害のある学生とした。

質問紙　大学生活における支援について、現状の支援内容と本人の希望を、それぞれ項目ごとに選択肢から選び回答する形式とし、一部自由記述を求めた。質問紙の内容は、①プロフィール、②入学前相談、③資料の入手、④資料の提出、⑤講義等、⑥定期試験、⑦図書館・参考資料室、⑧学習室・専用ロッカー、⑨支援機器・視覚補助具、⑩施設・設備、⑪視覚に障害のある友人との関わり、⑫学生生活、⑬高校時代に身につけておくべき力の13項目とした。

手続き　調査目的を説明し、回答は本調査のみで利用することを確認した後、調査協力の同意を得た学生に対し、質問者が質問紙の内容をもとに口頭でインタビューし、回答を書き取った。なお、本調査の実施にあたり、科学研究費補助金（奨励研究）を受けた。

本稿では、調査項目のうち、定期試験の実施方法についての配慮（時間延長、別室受験、出題方法の配慮、解答方法の配慮、レポートへの変更）を中心に、2008年度の調査結果と比較し、結果をまとめ、分析した。

３．結果と考察

（１）対象者の属性

視覚障害のある大学生および大学院生45名（男17名・女28名）、平均年齢21.2歳であった。

在学する学部は、文系37名、理系8名で、在学大学数は35校で、うち大学院が2校であった。学年は、1年次8名、2年次9名、3年次12名、4年次14名、大学院生2名であった。

視力は、0.03未満が27名（うち点字26名）、0.03～0.1未満が11名、0.1以上が7名であった。使用文字は、点字27名、墨字（拡大文字を含む）18名であった。

視覚障害のある大学生の数が極めて少ないことを考慮すると、45名を対象とできたことは、価値が高いといえる。

（２）点字使用学生の特徴

点字使用学生に対する出題方法の現状を高い順にみると、2008年度は「点字」（75.0%）、「口頭」（39.3%）、「電子データ（以下、データ）」（25.0%）で、2015年度は「点字」（92.3%）、「データ」（65.4%）、「口頭」（7.7%）であった。一方、希望を高い順にみると、2008年度は「点字」（85.7%）、「データ」（32.1%）、「口頭」（7.1%）で、2015年度は「点字」（92.6%）、「データ」（37.0%）、「口頭」（3.7%）であった。2008年度に比べ、現状のデータの割合が増加したが、データでの出題を希望している学生の割合はほとんど変化していなかった。データでの出題は、出題する側にとっては点訳のための時間や費用が軽減でき、負担が小さくなるが、学生にとっては問題の全体を把握するのに時間がかかることや、下線や空欄などの記号類を見つけにくいこと、レイアウトが把握しにくいことなどから、負担が大きいと考えられる。

解答方法についても、「データ」での解答の現状が、2008年度の53.6%に対し、2015年度は80.8%とかなり増加したが、希望は、2008年度78.6%、2015年度55.6%と減少した。逆に、点字での解答を希望する学生が増加していた。成績に影響する試験の場合には慎重に読み書きする必要があるため、何度も読み返すことができ、必要な部分をいつでも確認することができる点字を希望する学生が多いと考えられる。

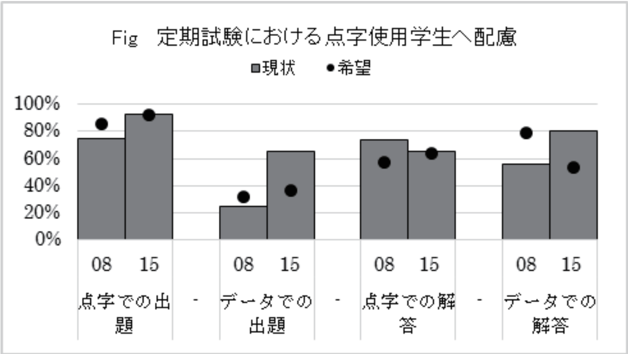

Fig　定期試験における点字使用学生へ配慮

（３）墨字使用学生の特徴

墨字使用学生に対する出題方法の現状では、2008年度と同様に「問題用紙・文字の拡大」の割合が高く（2008年度69.2%、2015年度70.6%）、解答方法の現状でも、「解答用紙の拡大」の割合が最も高かった（2008年度30.8%、2015年度53.8%）。希望でも、「問題用紙・文字の拡大」や「解答用紙の拡大」が最も多く、ほとんどの学生は拡大された問題用紙や解答用紙で対応できているようであるが、「フォントの変更」や「解答用紙の変更」、「データ」での出題や解答を希望している学生もいることがわかった。弱視の見え方は個々で異なるため、各学生のニーズに対応してもらえることを期待する。

(SEIWA Yoshiko , AOMATSU Toshiaki)